

令和元年6月19日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05672

研究課題名(和文)語の統合度と文の相関関係に関する研究 - 形態法の異なる言語の比較対照をとおして -

研究課題名(英文)A study on correlation between morphological synthesis and sentence

研究代表者

渡辺 己 (Watanabe, Honore)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：30304570

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,500,000円

研究成果の概要(和文)：アルタイ諸言語の節連鎖の発達が語・文の構造と独立性に関連していると推測していたが、特に述語動詞が文末に位置するという文の構造に関連していることが大きな要因だろうと結論付けた。その一方で本課題で対象とした言語はいずれも、その語や文の独立性とは関係なく、非定形の動詞が定形性を獲得する方を歴史的に発達させてきた。同じアルタイ型言語に分類される言語の間でも、共時的に文末詞を発達させている言語と、文末詞で表される機能を動詞の形態によって表す言語(シベ語)の統合度の違いがみられる。文末に位置する述語が補助動詞や文末詞のように独立的な要素を取り込むことにより、定形の節ないし文を発達させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の意義としては、典型的なタイプが異なると言われている複数の言語について、それぞれの言語を専門に研究し、資料も自らが現地調査を通して集めている研究者が集まり、従来取り組まれてこなかった問題に取り組んだことである。

特に、日本語も含まれると考えられる、いわゆる「アルタイ型」の言語について、それとは大きく異なるタイプの言語(孤立語および複統合語)と比較対照をすることによって、定形性と節のあり方についての理解が深まったことは、今後、日本語の研究ともつながっていく可能性があり、本課題で研究対象とした言語を超える可能性がある。

研究成果の概要(英文)：We predicted that the development of clause chaining in the so-called "Altaic-type" languages is related to the structures and independence of word and sentences. This prediction was basically correct; moreover, the sentence-final position of the predicate verb appears to be a strong factor in its development. Also, the languages we studied in this project showed that nonfinite verb forms have historically developed finiteness, regardless of the degree of independence of word and sentences.

Within the Altaic-type languages, there are languages that have developed many sentence-final particles and those that use different verb forms instead (such as Sibe); these sub-types of languages show different degrees of synthesis. Both types appear to have developed finite clause or sentence by integrating auxiliary elements or sentence-final particles into predicates, which take the sentence-final position.

研究分野：言語学

キーワード：アルタイ型言語 言語類型 類型論

## 1. 研究開始当初の背景

孤立語や、アルタイ型と言われる言語を専門とする、特に本申請課題の参加者との意見交換をとおして考えたことを実証的に研究するため本申請課題を企画立案するに至った。ここでアルタイ型と呼ぶ言語は、連辞構造と呼ばれる膠着的形態構造をなし、SOVの基本語順を有する一方、主語などの名詞項を表示せずとも文が構成可能となるような言語を指す。典型的にはモンゴル諸語、チュルク諸語など系統的にアルタイ諸言語に属する言語がこのタイプに分類されるが、朝鮮語・日本語やインドのドラヴィダ系諸言語もこのタイプに属するため、言語系統としてのアルタイ諸言語とは一致しない。次に、複統合的言語の例としてスライアモン語、孤立語として中国語を例示する(1, 2)。それぞれの言語で、「語」と「文」を括弧で括り下付き文字で示す。これらの例からわかるように、同じ意味内容を伝えるためにスライアモン語では拘束形態素がつらな「1語」によって文を、中国語ではそれぞれが1形態素であり、かつ自立した4つの語で文を構成する。従来類型論では、このような語内部の統合度という形態的相違にもとづいて、両言語を「複統合語」と「孤立語」として両極に位置づけてきた。

### (1) 複統合語：スライアモン語

[səp<sup>3</sup>-t-Ø-as]<sub>語</sub> = 文

叩く-他動詞化-3人称目的語-3人称主語

「彼は彼を叩いた」

### (2) 孤立語：中国語

[[他]<sub>語</sub> [打]<sub>語</sub> [了]<sub>語</sub> [他]<sub>語</sub>]<sub>文</sub>

3人称 叩く 完了 3人称

「彼は彼を叩いた」

中国語の文を構成するそれぞれの「語」は、音韻的には単独で発話可能な単位でありながら、文の構成要素として配列されて初めて統語役割を担うものであり、単独では意味をなす発話として成立しにくいという特徴をもつ。つまり、「文」を構成するこれらの「語」は拘束的・非自立的であるともいえる。この点が、スライアモン語の「語」と、語を構成する拘束形態素という関係ときわめて類似しているように見える。一方アルタイ型の言語では、文の中の語を取り出し、それぞれ単独で発話しても、発話として成立するという点で中国語とスライアモン語とは大きくその性質が異なる。

さらに、アルタイ型諸言語は *converb* (副動詞) が非常に発達し、多くの節を次々と連鎖させうる特徴を持つが、中国語やスライアモン語では、そのような節連鎖は非常に限られている。これはいわゆる *finiteness* (定形性)の問題といえるが、こうした違いも、上記の語・文の構造と独立性に関係していることが考えられる。

## 2. 研究の目的

本申請課題は、参加者それぞれが現地調査をとおして得る一次データをもとに、典型的タイプの異なる言語において、語の統合度と、語が文を構成する仕組みに関して、従来指摘されてこなかった類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。具体的には、複統合語、孤立語、そしていわゆる「アルタイ型」言語を対象とする。従来類型論では、複統合語と孤立語が両極に位置づけられてきたが、本課題では、この両タイプには共通する特徴が見られることを明らかにし、その一方で、これら2タイプに対し、中間的とも考えられてきたアルタイ型言語に特異な特徴があることを明らかにすることを目指す。

## 3. 研究の方法

本申請課題における類型的研究は、あくまで参加者が現地調査をとおして得る信頼できる一次データに基づいておこなった。そのため参加者は、研究期間の3年間をとおして、研究対象言語の現地調査を海外でおこなった。調査地域は、カナダ、中国、モンゴルであった。現地調査で得たデータをもとに、全員で研究討議をおこなった。

## 4. 研究成果

参加者の現地調査により得られたデータをもとに語の統合度と文の相関関係にかんして分析をおこない、論文・学会発表等でその成果を報告した。以下にその概要を述べる。

節連鎖および定形性(*finiteness*)と語の統合度に関して：節連鎖と語・文の独立性には相関関係があるのではないかという当初の見通しのもと、各言語の節連鎖構造について各自調査を実施し、その成果をまとめた。代表者の渡辺はスライアモン語の *insubordination* (脱従属化；「言いさし」)にかんする論考(*Insubordination in Sliammon Salish*)を自身が編集者として編集した学術書(*Honoré Watanabe and Nick Evans (eds.), 2016*)にて公刊した。また児倉はシベ語における分詞の定形性にかんする論文(*Kogura 2019*)を、山越はシネヘン・プリヤート

語および中期モンゴル語の分詞の定形性にかんする論文 (Predicative non-past participles in The secret history of the Mongols, *Altai Hakpo*, 26, 85-101, 2016 年 ; 「シネヘン・ブリヤート語の 2 種類の未来表現: 分詞の定動詞化に関する 3 類型」『北方人文研究』10 号, 79-96, 2017 年) およびモンゴル諸語における insubordination についての論文 (Yamakoshi 2017) を刊行した。当初の見通しではアルタイ諸言語の節連鎖の発達が語・文の構造と独立性に関連していると推測していたが, とくに述語動詞が文末に位置するという文の構造に関連していることが大きな要因だろうと結論付けた。当初の見通しにおおむね沿うような結果が得られたといえる。その一方で本課題で対象とした言語はいずれも, その語や文の独立性とは関係なく, 非定形の動詞が定形性を獲得する方策 (insubordination や分詞の定形化) を歴史的に発達させてきたことが明らかとなったのは本研究課題の大きな成果の一つといえる。

アルタイ型言語における機能からみた文の定形性 (finiteness) と語の統合度に関して: アルタイ型言語では語が単独で文として機能するという当初の観察をもとに, アルタイ型言語において文という単位がどのように形成されるかを特に文の機能に注目して考察し, その成果をまとめた。児倉は文の述部の要素 (動詞の形態と補助動詞) の意味分析を行い, また文の述部の要素の機能と文の韻律的特徴との相関を論じ, 著書『シベ語のモダリティの研究』として公刊した。さらに, シベ語における定形性 (finiteness) について機能を中心に据えることにより文の述語動詞の形態統語的特徴・韻律的特徴が適切に捉えられること, また歴史的に (定型の) 文として見るべきものの変化していることを示し, Kogura (2019) として公刊した。さらに同じくアルタイ型言語に分類される現代ウイグル語とシベ語の比較を通して機能的に見た文のあり方の違いを探るため, 現代ウイグル語の文末詞の意味分析を行い, 発表を行った。これらの研究を通し, 本研究課題の枠組みでは同じアルタイ型言語に分類されるシベ語と現代ウイグル語の間でも, 共時的に文末詞を発達させている現代ウイグル語と, 文末詞で表される機能を動詞の形態によって表すシベ語というような語の統合度の違いがみられること, 一方で, シベ語と現代ウイグル語に共通して, 文末に位置する述語が補助動詞や文末詞のように独立的な要素を取り込むことにより, 定型の節ないし文を発達させたという通時的変化を想定できることが明らかになった点も本研究課題の大きな成果の一つと言える。

言語データの公開: この研究課題に付随して, 現地調査によって得られた言語資料についても各自公開をすすめた。公開資料としては渡辺のスライアモン語テキスト (Watanabe 2019), 山越・児倉は李林静・山越康裕・児倉徳和編 (2018) がある。いずれも危機言語・少数言語の貴重な言語データとしてひろく活用されるよう, 逐語訳・文法情報を付した形で整えている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 15 件)

- WATANABE, Honoré, “A Sliammon Text: “Birds and Rain”, as told by Mary George.” *Northern Language Studies* 9, Japan Association of Northern Language Studies, 123–130, 2019 年. 査読有
- YAMAKOSHI, Yasuhiro, Introduction: “Altaic-type” Languages, *Asian and African languages and linguistics*, Vol. 13, 1-5, 2019 年, doi/10.15026/92948. 査読有
- KOGURA, Norikazu, Finiteness in Sibe: Aspects of Finiteness and Historical Development, *Asian and African languages and linguistics*, Vol. 13, 81-112, 2019 年, doi/10.15026/92952. 査読有
- 児倉徳和, シベ語における「非現実」と知識管理, 『東京大学言語学論集』, 39 号, 161-182, 2018 年. 査読無
- WATANABE, Honoré, “The polysynthetic nature of Salish.” Michael Fortescue, Marianne Mithun, and Nicholas Evans (eds.), *The Oxford handbook of polysynthesis*. Oxford: Oxford University Press, 623–642, 2017 年. 査読有
- YAMAKOSHI, Yasuhiro, “Insubordination” in Mongolic Languages, *Mongol Studies and Stable Development*, 289-292, 2017 年. 査読無
- 沈力, “因果連”の表達策略与類型(「コーザルチェン」の表現方策と類型), 『当代語言学』, 18, 159-175, 2016 年. 査読有

[学会発表] (計 15 件)

- 渡辺己, 「セイリッシュ語形態論の問題点: 語彙的接辞か否か」, 日本北方言語学会第 1 回, 2018 年
- KOGURA, Norikazu, On the verbal noun in Written Manchu and Sibe: Beyond person, evidentiality and egophoricity, The 2nd International Conference of Sibe Studies, Department of South and Central Asia et al., Faculty of Arts, Charles University, Charles University (Prague), 2018 年
- KOGURA, Norikazu, The Perfective Verbal Noun V-Xengge in Sibe: Beyond Person, Egophoricity and Temporality, First International Workshop on Contact Languages: The East Asia Indian Ocean Connection, Faculty of Social Sciences and Humanities, University of Mauritius, University of Mauritius, 2018 年

- YAMAKOSHI, Yasuhiro, Sentence-final possessive markers in Shinekhen Buryat, 第13回ソウル国際アルタイ学会, 国際会議, The Altaic Society of Korea, National University of Mongolia, Ulaanbaatar, 2017年
- 山越康裕, プリヤート語未来分詞の文末用法: 分詞の「再名詞化」によるモダリティ表現, 日本言語学会第152回大会, 日本言語学会, 慶應義塾大学, 2016年
- 沈力, 「漢日対比方言研究の一点啓示 - 以持続体標記の語法化為例 - (基調講演)」, 第八回漢語方言語法国際學術フォーラム(国際学会), 福建師範大学(中国)2016年

〔図書〕(計 4 件)

- 児倉徳和, 『シベ語のモダリティの研究』, 勉誠出版, 2018年, 480ページ
- 季林静・山越康裕・児倉徳和編, 『中国北方危機言語のドキュメンテーション: ヘジエン語 / シベ語 / ソロン語 / ダグール語 / シネヘン・プリヤート語』, 三元社, 2018年, 256ページ

〔産業財産権〕

- 出願状況(計 0 件)
- 取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 沈 力

ローマ字氏名: (SHEN, Li)

所属研究機関名: 同志社大学

部局名: 文化情報学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 90288605

研究分担者氏名: 清澤 香

ローマ字氏名: (KIYOSAWA, Kaoru)

所属研究機関名: 国際基督教大学

部局名: 教養学部

職名: 特任講師

研究者番号(8桁): 30758793

研究分担者氏名: 山越 康裕

ローマ字氏名: (YAMAKOSHI, Yasuhiro)

所属研究機関名: 東京外国語大学

部局名: アジア・アフリカ言語文化研究所

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 70453248

研究分担者氏名: 児倉 徳和

ローマ字氏名: (KOGURA, Norikazu)

所属研究機関名: 東京外国語大学

部局名: アジア・アフリカ言語文化研究所

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 70597757

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。